

會



報

1960年8月

210

日本山岳会

木暮理太郎翁
碑前祭

神谷 恭

去る廿六年五月六日の除幕式以来毎年新緑の頃となると金峯山、ミヅガキ山を目の前に仰ぐ金山平に、岳聖木暮理太郎翁のレリーフを前に故人を慕う人々相集い、ささやかながら碑前祭とそして記念山行とがつづけられて来たのであるが、ゆくゆくはウェストン祭と同じ趣旨の催しに盛り上げたいと念願しつつ今日に到つた次第である。

ちょうど本年五月七日は翁の十七回忌に当るので本会主催で盛大に催しては如何かと日高会長にはかり、会長から山梨支部の三井さんへ連絡されてあつたところ、幸い支部では地元増富観光協会及県岳連との間で、かねがね奥秩父の開拓者としての木暮翁のレリーフを広く世に紹介し、奥秩父の木暮祭に盛り上げようという計画で内々の相談が進められ、それが今年に入り急速に具体化し、三井さんからの情報によると、前記のように盛り上げてゆくためには、現在レリーフの在る位置は登山路より

程遠く、不便なれば適當の場所へ移転したい希望で、山梨県観光課の協賛を得、既に拾万円の予算獲得に成功し、今年秋までに適當の地へ移転、その完成祝いを兼ねて花々しく碑前祭を催したい。なお明年からは翁の御命日である五月七日前後に催すことにする云々とのことであつたが、自分としてはそこまで盛り上げてもらつたことはまことに嬉しいが、移転の場所と建設方法に少からず不安をいだいていたのと、かたがた秋まで碑前祭を延ばされた事が不本意なので、取りあえず本年は霧の旅会主催で碑前祭を行い、序でに昨夏の颱風禍による被害状況も調べ、その上で地元の御意見を伺いたいと思ひ去る六月廿五日例年の通り九時廿三分浅川莞の空いた列車で出発した。浅川から野口、山崎、松本、原田、市村、一柳夫妻子、甲府より三井、百瀬両氏外二名、県観光課の森谷氏、毎日支局の山内夫妻、静岡より牧野氏、増富より八巻県議、津金氏等一夜遅く江見嬢外一名到着。

同日夕刻金山の有井館に集合、折柄満開のレンゲツ、ジとアヤメで碑前を飾り、有井さんが用意してくれたお神酒を手向け一同乾杯して式を終えたが一年振に見る周囲の余りの荒廃せるに一驚を喫した。かねて日高さんからうかがつてはいたが、これ程ひどいとは思わなかつた。前年来た時レリーフを覆つていた赤松の太木は根底より倒壊し、周囲の白樺、落葉松、ヤシオツ、ジ等ことごとく倒れ、そのためレリーフのある巨巖は丸裸にされ、根元も風雨に洗われ、ここ数年の裡には倒壊の虞れなしとは断言出来ず、参列者の多くが推察された移転の候補地点も我々の考えと全く一致して、現在のところより約一〇〇米許降つた芝生の明るい台地で、金峯、ミヅガキの展望にも申分なく、直下にレンゲツ、ジの群落を俯瞰する景勝の地で、こゝに適當の自然石を積み適宜の高さにレリーフをはめこみ、碑文は懸案の通り銅板に刻むこととし其設計一切をレリーフの作者佐藤久一朗氏に依頼する事に決定、いづれ山梨支部で建設委員会を設け近日発足することに意見一致したことはまことに喜びにたえない。なお前記果実交付の予算のみでは不足すること明らかであるが、これは追つて地元及び東京側有志より寄付を仰ぐこととなるうが、よろしく願ひする。

金山詣で

日高信六郎

山梨県体育大会で金峯山の集中登山をやる機会に金山まで来てはと、三井山梨支部長と百瀬県岳連会長からお招きを受けたので、久しくご無沙汰していた木暮さんの碑にお目通りもしたく、お線香を用意して出かけたのは九月二十一日の朝。列車が勝沼を出るころから七号台風のなまなましい爪あとが目につきはじめた。

増富の夜は諸君と膝つき合せて、地方岳界の近況や希望を聞いたり、日本山岳協会設立の模様を報告したり、楽しく有益だつた。支部と岳連とが一心同体の気持ちでやつておられるのはうれしかつた。

翌朝は金山に行き、県下二百余の元氣な若人に挨拶したのち、木暮さんの碑へと登つた。台風はレリーフのまわりの木を倒したので、明かるくさびしくなつたが、巨岩のわれ目から小さなナナカマドが枝をたれて風情を添え、金峯はかわらぬ姿を高くあらわして、いつも微笑を絶たぬわれらの木暮さんをはるかに見守つていた。

(三十四年九月 記)

ヒマルチュリより帰つて

宮下 秀 樹

慶応義塾創立百年を記念するヒマラヤ登山隊が体育会山岳部並に、OB団体たる登高会の手で計画されたのは一九五七年春の事であつた。当時の相内山岳部長、青木登高会幹事長を中心とし、対象をヒマラヤの最峻嶺とうたわれ今日な何人の登頂をも許さないジャヌー峰として進められた計画は複雑な入国事情、長大なアプローチ、就中ネパール政府の登山許可の困難等の事情もあつて、其の実は仲々難しく思われていた。

一方我々若年層の間では、数次に亘る日本山岳会のマナスル登山の経験を生かして、マナスルの南約五十軒程に位置する峻峯ヒマルチュリへムシコラ側からの登攀計画が着々と進められていた。

此の様な情勢の下に五八年秋に至り我々登高会若手グループに五九年春の遠征を目標に塾創立百年記念登山計画の作成が命ぜられ、登山の最高決定機関として楨さん、三田さんを中心としたヒマラヤ委員会が、下部に山田二郎さんを中心とした実行委員会が生れて実行の第一歩は踏み出された。

併し我々の計画は思わぬ処から忽ち一頓挫を来たしてしまつた。即ち我々と相前後して日本山岳会が同じく五九年春に同目標のヒマルチュリに登山隊を派遣することと決定し、従つて登山に必要な外貨は我々に割当不可能の旨日本山岳会よりの通知に接したからである。我々の落胆と不満は何処にぶつけるすべもなく空しく五九年を送り一九六〇年春を期するの他なかつた。

然しこれを機に同隊へ会員田辺君を参加せしめ我々の会は新たに少壮気鋭のヒマラヤ経験者を加えることが出来、僅かに慰むる処があつた。

一方日本山岳会がヒマルチュリに向う事を決定したため我々は目標を中部ネパールの未踏の高峯アナンプルナ第二峯に転じ、此が登山許可をネパール政府宛に提出し其の準備を進めていたが、これ亦数カ月後先願の英国登山隊に許可したとの報に接し（今春登頂に成功）我々の計画は更に次の目標であつたダウラギリ第二峯（七、七五一米）へと転ぜざるを得なくな

つた。

斯くして昨秋加藤（喜）さんを隊長とした四名の踏査隊をダウラギリ第二峯に派遣して偵察に当らせたが、月余に亘る綿密な調査にも拘らず遂にダウラギリ第二峯へのアプローチを見出し得ぬまゝ帰途についた。しかし帰路をムクチナートよりマルシャンディにとり、かねて計画していたヒマルチュリの西面に登攀可能なルートを確認して十二月末帰国したのは大手柄であつた。

ヒマラヤ委員会では此の報告に基づき数次に亘る慎重審議の結果、日本山岳会の好意ある了解を得てこゝに塾創立百年記念ヒマルチュリ登山隊が幾多の曲折を経て決定したのであつた。

至難を極めた資金の調達、装備、食糧の準備に各方面の絶大な御支援を戴き、一月十日山田隊長以下十名の隊員が決定された。

隊長	山田 二郎 (37才) OB
隊員	宮下 秀樹 (28才) "
"	田辺 寿 (28才) "
"	中沢 公正 (27才) "
"	村田 茂 (27才) "
"	大森弘一郎 (25才) "
"	原田 雅弘 (23才) 文四
"	川田 善郎 (22才) 法四
"	高垣 統 (31才) 医OB
"	木村 勝久 (29才) 毎日新聞社カメラマン

平均年令二十八才弱の若い隊であり内ヒマラヤの経験者は四名に過ぎなかつた。

五座を越える荷物が二月末横浜港を積み出されて三月初旬先発二名は空路、本隊八名は中旬香港迄船を使つて後カルカッタに飛びボカラ空港に集結したのが三月末、印度国内のトラックに依る貨物輸送が事故のため遅延し、キャラバンの出発は予定より十日遅れの四月十日になつてしまつた。

山麓のベースキャンプに至る距離の短い事が幸いしたが此の十日間の遅れは何としても痛かつた。我々は一月以内で何とか成功すべく何度も計画を練直し四月十九日ベースキャンプが建設されるや直ちに行動を開始された。

前半の降雪、落雷にもめげずヒマラヤ経験の無い若い隊員が予想外に強く、後半にはシェルパ以上の荷上げをやつてのけたのは隊長の好指揮、ドクターの好判断に依るところが大である。五月三日に起きた不測の事故を乗り越え、六千五百米付近の水壁に二週間近くの日数を費しながらも七千二百米の第五キャンプに全員到達出来た。我々自身意外と思う程皆の調子が揃つて良かった。此の為二十四、五両日に行われた頂上攻撃も非常に余裕のあるものとなり、無事幸

運を掴むことが出来たのである。確かに今年の隊はツイていたと云われる。

天候にしても例年より可成り良い状態のようだったし、殊に一番警戒された西面に強い影響を与えヒマラヤの偏西風も六千八百米のキャンプIV付近の数日間を除いては余り問題にならなかつた。

地形に関しても昨年の加藤隊の指摘した事に殆んど誤りは無かつた。下部の技術的困難さは予想以上ではあつたが大量に準備した登攀用具を充分に駆使する事に依りともかくも安全なルートを確保出来たし、頂上直下のバンドも幸いな事に一本のクラックが我々を頂上へと導いて呉れた。

然し天運とはツイてくれるのではなくてツカセルように努力することに依つて向いてくるものであるからうか。結果的にみても最後の好天であつた二十四、五両日を登頂日と決定した隊長の優れた判断、百米を越す大氷壁に連日焦らずに闘志を燃し続けた各隊員、我々の持つ力をフルに発揮し得たものと信じている。そしてこれはまたとりも直さず我々の最高のチームワークに起因する勝利とも云えよう。勿論このチームワークとは単に山に於て生れたのでなく、都会に於ける、準備期間中に於ける、

いや嶺さん以来連綿と続いて来た
塾山岳部の伝統あるチームワーク
と云つても過言ではあるまい。

一方山登りの成功とは頂上に立
つ事が究極の目的ではあつてもそ
れが全てではない。その点に於て
我々は失敗を犯してしまつた。

五月三日未明キャンプIを襲つ
た堅氷のブロックはローカルポー
ター一名を奪ひ一名を負傷させ
た。氷のブロックが雪崩の本流と
いか程遠くとも、またいかなる方
向にも四散する可能性のある危険
を過小視した重大なるミスであ
る。一旦建設したキャンプIを移
動しておきながらの事故にも何ら
の弁解はできない。

我々隊員と異り、金銭的な契約
で我々の登山を助けるポーターを
死に至らしめた事はなおさら悲し
く我々の深く反省しているところ
である。

近來ネパールのヒマラヤンソー
サティとダージリンのシェルパク
ライマイズアソシエーションとの
対立で各国遠征隊はその雇傭する
シェルパの問題に非常に頭を悩ま
されているが、我々の場合も昨秋
の偵察隊の事前連絡にも拘らず優
秀な連中を集めることが出来ずに
サーダーも居ない隊として相当な
苦勞を味わされた。
何れ一本化して行く事になると

思われるが未だ現在の処ヒマラヤ
ンソサティの基礎が確かりして
いない処から混乱を招き屢々、各
遠征隊毎のケースバイケースで処
理されて行くことが多い。確かに
ネパールシェルパのランキングな
どかなりいい加減のもので同性同
名の異人が非常に多く余り信用で
きない。直接本人のサーティフィ
ケーションを調べる以外には確認
の方法は無いとも云える。併し一
方日本隊のみ何故ダージリンシェ
ルパに固執するののかとの反論も強
かつた。トラブルメーカーと云わ
れる所以だろう。

我々としては気心の知れた優秀
なシェルパと山に登りたいのは至
極當然な事で名前の解つた連中に
拘泥するわけだが、今度の場合は
種々の手違いから余り良いシェル
パ達が集められず、殊に英語を話
すシェルパが僅か一人と云うのは
可成り痛かつた。併し反面年令の
若いヒマラヤの未経験者が多かつ
た我々の隊では、同様若い無名の
シェルパ連に反つて奮い立ち、荷
上げは勿論常にテントの建設や炊
事に至る迄先頭に立つて働くのが
極く当り前の気持となり結果的に
は我々自身の力でと云う貴重な経
験と自信を持つことが出来たのは
幸いだったかもしれない。
最後に紙面をお借りして、昨年

の村木隊の皆様始め日本山岳会の
諸先輩方の寄せられた御好意、御
協力を深く感謝致し、厚く御礼申
し上げて筆をおきます。

(一九六〇、七、三〇)

第二〇八回小集会の御通知

◇日時 九月十七日(土)午後六時

◇場所 お茶の水体協会議室

◇演題 アラスカ、マツキンレー

登山

◇講師 早大 吉阪隆正氏

明大 交野武一氏

今回から新会員の方にも気軽に
御来会いたゞけるよう係が留意し
ます。多数の御集りをお待ちしま
す。

▼十、十一月集会予定

一、ヒマルチュリ報告(慶応隊)

一、アビ登頂(同志社隊)

一、ジュガルヒマール(東海岳
連)



カッタは山下一夫氏

大ヒマラヤ展を見て

★

深 田 久 弥

日本以外にイギリスとスイスしか
ない。

しかもこれらの日本隊が決して
恵まれた条件で出たのではない。
費用の調達、食糧や装備のくふう、
現地との面倒な交渉、さまざまな
苦勞を重ねたあげくである。山が
好きでなかつたら、たれがこんな
苦勞をするものか。

展覧会の前半は、ヒマラヤ一般
について日本隊が得て帰つた気象
地質・動植物・民俗などの収集品
が陳列される。後半は各個の日本
隊の成果が年代順に並ぶ。

その最初は一九〇〇年の河口慧
海師のテベット行である。私はか
ねてから慧海師の探検家としての
偉さに心服していたが、こんど初
めてそのおびただしい貴重な収集
品に接して、目をかがやかせた。
こんな機会はまだとないだろう。

慧海師の旅行記を読むと、師が
日本をたつ時、世人から大バカ者
とか氣違いとか罵られたとい
う。師はあらゆる辛酸をなめて、
ネパールからヒマラヤを越えてチ
ベットにはいつた。われわれの誇
るこの偉大なバイオニアにつづい
て、三十五のパーティ、人数にし
て百七十五人がヒマラヤにはいつ
ている。それらのパーティが一つ
残さず陳列されているが、順々に
見て行くと、その百七十五人が全

たたとえば、会場を圧している八
千米以上の高峰十四座の大写真で
ある。東西二五〇キロにわたる
広大な山岳地帯に散在する、十四
座の巨人峰の威容を全部日本人が
とつてきて、それがずらりと並ん
でいる。こんなマネのできる国は

部、どこかバカ者や気遣いらしく思われている。

三十五のパーティの中には、純粹な登山だけでなく、個人の山地旅行や学術探検隊もはいっているが、いずれにしろ未開の困難なヒマラヤへ行こうとするには、よほど山が好きでなければならぬ。

登山隊が盛んになったのは戦後で、一九五三年以後、毎年エクスペディションが出ている。その中には、マナスルを筆頭に、チョゴリザ、ヒマルチュリ、その他、ヒマラヤ登山史上にサンと輝く登頂記録がある。展覧会場の壁面をうずめる五百枚の写真と、各隊の持つて帰ったおびただしい記念品をみて、日本のヒマラヤ登山機運の盛り上がりは私にはつくづく感じた。政府から命じられて行つた隊や招待を受けて行つた隊は一つもない。みんな自分の意欲から立ち上がつて、多くの困難を克服して出かけたのだ、私はここに日本の力強いエネルギーの一つの現われをみる。

時は登山期、どこの山も元氣な登山者であふれている。この旺盛な登山熱の底辺があつてこそ、そのピラミッドとしてヒマラヤ登山が成り立つ。山の好きな人でヒマラヤにあこがれぬ人はいないだろう。五百坪の大展覧会場はヒマラ

ヤの山気でみちている。会場を出てからも私はヒマラヤの興奮からさめることが出来なかつた。

昭和三十五年七月二十三日から八月二日まで東京池袋西武百貨店八階ホールで開催。

(七月二十九日毎日新聞より)

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

「ブーム」と

自然保護

渡辺公平

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

八月一日の夕刊に男体山の山開きのことが出ていた。この日光の古い山では山開きという言葉を使わず、登拝祭というらしい。千二百年も前から続けられている行事で、午前零時太鼓を合図に二荒山神社の正門が開かれると、すげ笠に金剛杖といういでたちで登り出すという古典的なものだ。

もつとも古典的といつても、登る人間の方は恐らく信仰の人は少なからう。登拝者の数は例年より約二割多く約八千(他の新聞は一万と伝える)しかも女性がその半数に近かつたというから「六根清浄」よりはスポーツとか、レクリ

エーションに近い人間の方が多かつたのではあるまいか。

そんな余計なせんさくはこの際不要であろう。とにかく男体山の山開きに一人近い登山者が押しかけたという登山の隆盛さに驚きを新らたにするだけだ。頂上には押すな押すなの人波だつたと新聞は書いているが、この盛況さにはもちろんこの男体山だけのことではない。

七月剣岳へ行つてきた徳久君から、山日記編集会議の席で聞いたところによると、カニの横ばいがこの夏から複線、つまり上りコース、下りコースの二本立てとなつたが、それでも団体が多いので、下り組を待つのに三十分もかかつたという。スキーゲレンデと同様交通整理のパトロールが、近いうちに山にも実現するかも知れない。

×

数時間も新宿の地下道やホームに新聞紙を敷いて乗車を待つのもたいへんなので、松本行夜行列車の座席券を買おうとしたら、九時から売出すというのに五時から並ばなければならなかつたと友はいう。お陰で僕は辛い思いをしないうでアルプスへ行けることになつた。いつたいいつになつたら昔のように気軽に静かに山へ出かけられるようになるだろう。

上高地の宿も三週間も前に予約してやつと部屋がとれた。だいた以上高地などに夏のシーズンに泊ろうという根性がまちがつているといわれそうだが、これは僕の話ではない。僕ならウエスタン祭の行われる時期を選ぶさ。

以前ならこの頃でも南はまだゆとりがあつた。しかし今は違ふ。

七月末甲斐駒から仙丈へ出かけた僕の社の若い連中の報告によると、週末ではあつたが七丈も敷沢も満員だつたという。

信州ブームというが、まづたくこのブームいつまで続くことやら北海道ブーム、裏磐梯ブーム以上の永続性がありそうだ。ブームは結構だが、ブームのわくところに必ず人間洪水を伴う。谷川岳然り、濁沢然り、富士然り、尾瀬然り、阿寒然り、美ヶ原、八ヶ岳然り、乗鞍、上高地また然りである。この洪水が何よりも恐ろしいのだ。今列記したところを見れば判る。自然保護という大切なことが、その洪水によつて押し流されかけている。いつまでも拱手傍観していいものであろうか。山を愛する人間には、進んでこの貴く美しい自然を護る責任があると思うのだが、果して余計なおせっかいであろうか。

第二回国立公園大会

昨年と同じ七月二十一、二の両日厚生省、山梨県、国立公園協会主催のもとに、富士箱根伊豆国立公園船津内地区で開かれた。秩父宮妃殿下が臨席せられ、本会から日高会長が参列した。

初日の式典で本会会員の織田山陰支部長は「国立公園思想の普及に尽力し、大山国立公園協会を設立して行政に協力し、また遭難救助、公園道徳の普及と利用指導に努力した」故を以て厚生大臣から表彰され、また立山の老先達志鷹光次部翁と、昭和二十三年いらい富士山開きの当日を期し、集団登山し、山頂山道に屑籠を設置する等山頂の浄化に寄与した「小田原の相洋高等学校山岳部が同じく表彰されたのはよかつた。

日本山岳協会は本大会の協力団体として野外活動隊に約五十名(日本岳連小島副会長、高橋理事長の外東京、千葉、栃木、山梨各都県岳連)を送り、参加者代表の挨拶は地元の本会員百瀬山梨岳連会長がつとめた。活動隊は両日とも快晴にめぐまれ、河口湖畔から式場まで行進し、式後幕営した。登山班はお中道巡りに出かけた。

(日高記)

山小屋の

女あるじ

永原輝雄

「山小屋に生きる」という記事
を、昨年八月廿四日号の週刊女性
で見た私は、大町対山館の百瀬慎
太郎氏の死と、其後の針ノ木小屋
が、現在氏の長女美江さんによつ
て、経営されている事を知りまし
た。亡き慎太郎氏を追憶する気持
を伝えたいと思つて、手紙を差上
げたところ、計らずも秋深い針ノ
木峠からの返事に接しました。

本会員の中には、古い時代の対
山館を知つて居られる方も多く、
私と同じような懐旧の思いを、新
たにされる方もあらうかとその手
紙を披露する次第です。

「山小屋に生きる」の筆著

百瀬美江さんへ

突然手紙を差上げる、ぶしつけ
をお赦し下さい。

昭和十三年頃から、外地に出て
いて、終戦後引揚げてきた私は、
大町の対山館が、戦争中、軍需工
場の寮になっていた事は、聞いて
いましたが、御主人の百瀬慎太郎
さんの御消息は確めるすべくな

く、過していました。ところが最
近八月廿四日号の週刊女性の「山
小屋に生きる」の記事を見て、慎
太郎さんは十年前になくなられた
ことを知ると共に、あなたが亡父
の跡を継いで、立派に針ノ木小屋
を経営しておられ、お母様も元氣
で、大沢小屋におられる模様を知
り、遅れ走せ乍ら、お悔みを申し
上げ、あわせて私が初めて、対山館
を訪れ、慎太郎さんに、お近づき
になった当時（大正五年夏）を回
顧して、若き日のあなたの両親の
面影を偲んで、父上の御冥福を祈
りたいと思います。ようやく流行
し初めた、日本アルプスという名
に、あこがれていた私は、当時中
学の五年生でした。その春東京の
学校をおえて、豊科で歯科医を開
業した、友人の高橋君は、松本中
学で同窓だった慎太郎さんに、私
を紹介して、私を対山館につれて
いつてくれました。

毎朝対山館の店の広間は、針ノ
木越や、白馬行の登山客の出發で、
ごつた返していました。慎太郎さ
んが、強力の割当や、食料の配分
に忙殺されている間を縫つて、赤
いてがらの丸鬚げに、たすきがけ
という若い主婦が、甲斐甲斐しく
客扱いに、気を配つて居られまし
た。これは恐らく、新婚間もない
ころの御両親の姿ではなかつたで

しょうか。多分未だあなたが生れ
ぬ前のことだつたでしょう。

こゝに滞在一兩日の後、慎太郎
さんの親友、石川欣一さん（当時
帝大学生）が来られ、白馬に登る
というので、私の他に二、三の客
が、これに参加することになりま
した。石川さんのすゝめで、慎太
郎さんも多忙の息抜きに同行する
というので、いゝ機会だからと、
小学の五年になつた弟の孝男君
も、加わる事になつて一行七名、
それに強力五六名という大人数の
一行でした。

この白馬行が病みつきとなつ
て、私の山行は其の後長く続きま
したが、大糸南線が出来てからは、
大町に下車することも少なく、対
山館にも御無沙汰勝になりました
が、昭和十年春、南信池田に行く
機会に、雪の後立山を見物がてら、
対山館に慎太郎さんを訪ね、焔端
で昔話に一夜を楽しく送りまし
た。これが慎太郎さんとの最後に
なりました。

日本アルプスのれいめい期か
ら、登山宿として親しまれ、対山
館主人というより、慎太郎さんと
愛称されていた、あなたの父上の
遺業をつがれて、あなたが山小屋
の女あるじとして、若い登山者に
心温るサービスをして居らるゝ様
を、あの記事で読みとつた私には、

亡き慎太郎さんのみたまが、今も
あなたと共に、生きている様に感
ぜられます。

あなたが針ノ木小屋に居られる
事は、あなたの父上を知る我々古
い山友達に、対山館の慎太郎さん
の追憶を、いつまでも結びつけて
くれることでしょう。（略）終り
に登山客に、慈母の様に親まれた
お母様への御孝養と、御一家の健
康を切にお祈り申上げて、この便
りを終ります。

山小屋の女あるじからの返事

過日は思いがけなく、御親切な
御芳書に接し、お励ましの御言葉
を頂戴いたしまして、まことに有
難く存上げました。

戦争で対山館を失ひ、その後ま
た父を失いまして、一時は絶望的
な時期を過してまいりましたが、
その後おいおいに山と父につな
がる、多くの方々の御激励にはげ
まされ、山好きな父の血をうけま
して、なかなか山を捨てがたく
おります間に、もう私の山小屋生
活も、十年を経過してしまいました
た。母ももう六十一才になりました
が、近年非常に元氣で、大町で
息子の世話をしてくれて居ります
シーズンが終りますと、大町に
下りて、さやかな借家住いなが
ら、のんきな三人暮らしの生活で

ございます。息子が大きくなりまし
たので、冬はスキーをかついで、
親子で近くのゲレンデにまいりま
す。

御手紙に御座いました叔父（孝
男）も、松本におりまして、今夏
も針ノ木まで登つてまいりまし
た。私共は四人女ばかりの姉妹で
ございますが、それぞれに片付き
おかげ様で、幸せに暮しておりま
す。関電工事で黒部ダムの実現も
間近く、考える事も多くなりまし
たが、私は一生山を守つて生きた
く存じております。

大沢小屋は八月卅一日に閉ちま
したが、針ノ木小屋は九月の十五
日まで、開いて居りますので、唯
今はもう訪れる登山者もまれな針
ノ木峠に、秋の風をきいて居りま
す。岳樺や、なゝかまどが、ちら
ほら紅葉はじめて、紅ばら莓の
実も赤くうれました。

里との連絡もとだえ勝ちでござ
います。おそらくこの手紙も、お
くれて御手許に届くことゝ存じま
すが、おくれればせながら、御礼の
み申上げさせて頂きました。

御多幸をお祈り申上げます、乱
文御判読下さいませ、先は御礼ま
で。

九月五日 針ノ木峠にて

百瀬美江

雪の北アルプス

横断記(上)

内山数雄

日本北アルプスは本邦山岳の粹を集め、大自然の鑄造せる不朽の大彫刻ともいふべきもの、中にも白馬岳は高山植物の宝庫とし、雷鳥など珍奇な動物も多く棲み、氷河の痕跡のあるは広く知られ、ことに駿馬の天に冲するごとき山容は、秀麗、神秘、清絶、天下之に比すべきものはない。されば近年雪の北アルプスは、スキー登山者の憧憬の標的となり、スキーをもつて、かの造化の大創造たる白銀の世界に雷鳥、羚羊と遊び、その壯絶快絶の自然界に身を没して、千古消えざる大雪雲を滑降したならば!とは、全国スキー人の最大の希望だつたのである。

一、心細き単独登山

最初同行三人の予定であつた白馬岳スキー登山が、いよいよとなつて種々の都合で私一人となつたのは、三月廿五日であつた。冒険旅行の猛者東京高師の中島直人君は病氣のために、越後のスキーの大家燕温泉の笹川速雄君は妙高ス

キー倶楽部大会の都合で、これまた行かれなくなつた。

「単独で雪のアルプス横断は危険だらう!」ある人はわざわざ注意してくれたが、さればとて今は止むに止まれぬ場合である。この機を外して再びよき機会がめぐつてこようとは思われない。その日の朝は、家族を集めて、心ばかりの祝のしるしに、神酒とするめを食卓にならべて、盃を取交すうちに、嬉しいような、また切ないような思いは胸一杯に満ちるのである。この挙成功すればよし、然らざれば、折角勃興の機運に向える我が国スキー界に多大の汚点を止むることになりはせぬかと、身の責任の如何に重大なるかを感じざるを得なかつたのである。

八時、師範の大地、女子師範の平尾教諭、船越記者などに送られて家を出た。糸魚川駅には添田中学校長が出迎え、旅舎には高橋、大久保教諭がみえられて、白馬登山談に花が咲く。

二、白蓮華の咲けるが如く

明れば廿六日、糸魚川から姫川に沿うて約三里の間は自動車が行き、高橋教諭は根小屋まで同行してくれ。仰げば左には黒姫の秀峰峙立し、前には明星、駒ヶ岳などの連山白装して壮美のかぎりをつくしている。

「君の壮筆は、眠れる日本人を覚醒するに足りる。しつかり頼む!」根小屋で高橋教諭は別れの言葉を、私の胸に残していつた。船越記者、私、人夫の三人は後に残つた。道を縁どつて流れる姫

川の水は、白馬の雪や氷の雪溪の下を滑つてきたかと思えば、見る眼に懐しい。大正橋を経て小滝村に至れば、小学校の落成式で、この挙に心配してくれた村会議員小原氏始め、一同の歓迎にあつた。萱屋根の鋭角をなした家が雪中に散在する村長中村氏の宅に泊る。

廿七日は、小滝より山ノ坊峠を越えて大所の字木地谷に向ひ、途中雪崩に大所の橋が落ちてゐるので、平岩の方を廻る。

「無事成功を祈る!」一旦、危ないことは、めつたにやらんで下さい!」こういふて別れてゆく船越記者と人夫を送つて、村外れまでスキーで下りて行く、深い雪の通い路に二人は小さく黒く点のようになつてゆく。

小原氏と同道、山ノ坊峠に向ふ。雪の深さ一丈。峠からの白馬連峰の壮観は実に天下の大観であつた。白蓮華の花の開いたような峰々を小原氏は一々指呼してくれ。峠からの平岩への滑走は痛快で、小原氏より約一時間早く一茶店に着いた。

平岩は越後方面からの白馬登山口で、大所へここから約一里である。大所は戸数十戸、雪は一丈に余り、どのが門口に三丈位の竿を立て、その上に木の皮を長くふさふさしたものをつけていた。これを高男といひ、正月の十五日の夜、鬼が山から下つてくるがこの高男を恐れて逃げ帰るといふ深山伝説の一つである。

大所から木地谷まで約三十町、僅か九戸で白馬岳へ登る最終の部落である。小原氏の宅に泊ること

になつたが、雪は一丈を越えること二三尺でまだ冬の最中である。鍋をかける自在を使用せぬ習慣で、どんな大鍋でも五徳にかける。村人は質朴で、案内賃金も、信州、越中の者より安い。

三、丈余の熊を仕止めた猟師

廿八日は準備のため滞在。小原氏の配慮で二人の人夫が決定した。一人は信州北安曇群北小谷村大網の猟師で、昨年單身丈余の大熊を射とめたという強者の者。一人は小滝村字山の坊の猟師で久保田忠雄という。熊とりの名人である。

「昔から雪中白馬岳に登つた人はない。これが成功すれば私等の名まで永久に伝わるのだ」と二人は喜び勇む。飯米、味噌、味噌漬、塩、砂糖、葛粉、干鰯、提灯、マツチ、カンジキ、その他猟師が熊や羚羊とりに行くときに必要なものは総て用意した。「米は少くとも塩を多く持つように、米がなくなれば獣を獲つて食うが、塩気がなくなつたときはこまる」「山に入るには白玉粉がよい。湯を沸して粉を入ると餅ができる」と二人は交々という。昨年中島君の雪中立山登山には容積の多いパンは失敗、医王山スキー登山で吹雪に際、豆餅を持って中腹で一夜を救われた。それで万一の用意に豆餅を三升ついてもらつた。

廿九日朝、泡雪が三尺も降つた。家々のすべての窓は深く雪でとぎされて、この窓の雪を除くのが大仕事である。猟師の最も恐れるのはこの泡雪で、それが固まるまで

動かない。立山の失敗も泡雪が降つたからで、今日は木地谷で滞在しなければならなかつた。

四、翅長一丈の大鷹

三月卅一日は一天からりと雪晴れの好天気。午前八時、二名の猟師と共に木地谷を発す。村人は村外れまで見送つてくれる。道なき雪中を進めばぬかるんで股まで没す。夏のように汗が眼にしみて痛む。

登り約一里にして白池がある。降り積つた雪の池の真中と思われ、あたりを一直線に横断する間も、四辺の大古以来斧鉞をしらぬ大森林に囲まれ、樹下には兎、狸、貂などの足跡が縦横に印されて神秘の氣にうたれる。

白池から八丁坂までは雪崩や急峻池をつくらうなところもあり危険な箇所が多かつた。スキーはアザラシをつけて容易に登られるところでも、カンジキの猟師は荷物が多し、雪は深し、どう努力しても今日は蓮華温泉までは行きつけない。「これから少し下るとウド川ノ小屋があり、夏は樵夫がきてゐるし、冬は猟師が兎を獲りに来るところです」といふ。そこを下つて露営することにして、荷物大きなサワラの木のもとに下し、上へ針葉樹の枝をかけて見えないようにした。それは羽をひろげると一丈位もある大鷹がいて、それに発見されると食物を掠つてしまふのが恐ろしいのだ。一人は今夜の御馳走の兎をと針葉樹林の中へ行つた。と、銃声が聞える。「先生、兎をとりました」と足を

持ち上げて振つていた。それを引摺つてウド川の小屋で飯を炊く、兎を料理する。食い飽きれば、着のみのまゝで、外套を羽織つたまま、足を焚火へ差出してごろりとなる。冷え冷えとして幾度も目を醒し、消えがちになる焚火に木をさしこべる。

五、深山の奇遇！

蓮華温泉宿営

卅一日。早くウド川の小屋を出る。昨朝もやつたが、今朝も山の神様に祝砲をあげる。兎はびよんびよんと逃げ出す。八丁坂を登つて行くと、人声がして「おや獵師でもきたか」と思うと、これは同行の予定であつた笹川速雄君と人夫二人であつた。二人は走りよつて手を握り交して喜び、眼は感激の情に潤む。聞けば笹川君は、私が単独で出発したことをきいて大いに心配し、早く行つて引き返してくるよう依頼されてきたのであつた。この度こそ、どうしても目的を達成しなければならぬと食糧も充分準備して出発したものを、今更帰るわけにはゆかぬから、いつそ同行したらとすめた。

で、笹川君もミイラにとられたミイラとりになつてしまつた。スキには深い経験を持つ笹川君を得て、一行は元氣百倍、蓮華温泉に向つて前進した。

温泉の建物はすべて雪下に埋れておる。コスキ(板のシャベル)で二時間も雪を掘つて漸く真暗な中へ入つた。二人の獵師は兎とりに出かけ、笹川君の連れてきた二人のうち木地谷の内林釣次郎とい

う六尺余の男を残して一人は帰した。その中に獵師は二足の兎と一足の狐の子のようなのをとつてきたが、それはエゾイタチで、夏は茶色、冬は白色になる保護色をもつてゐる。夜は兎の鮎料理で舌鼓をうち夕飯を食べた。この宿営に最も苦しかつたのは寒さより煙であつて、それを防ぐには水泳用の緑のある眼鏡がよほどよいようである。

六、瀬戸川を越え金山宿営

四月一日、出発前に笹川君と湯の出口を見にゆく。立山の地獄谷と同様に広い赤土の上へ湯がふつふつと噴きだして、湯気の立ち上るさまは恐ろしい。

今日は雪倉岳の麓にある金山事務所迄であるが、好天氣が三日つづき、雪の反射光線に顔は真黒になりびりびりする。夜は穴のような小屋の煙で眼は強度の結膜炎をおこしている。太陽が閃めくと、眼はあけられず、笹川君が用意の黒布片をあてて、一行は盲目の行列のように進むさまは実に悲惨なものである。

温泉から約一里も進むと瀬戸川を越えて雲倉岳の斜面に移るが、ここが困難な悪場である。スキの名人笹川君は、凍れる雪を巧みに谷へ滑走し、私は斜面の少し緩やかな所をみて滑走して瀬戸川を越え、やつとのことで雪倉岳の斜面に移つた。三人の獵師は重い荷を負うて急坂を下るので、もし転んだら止めどもなく谷へ落下して命はない。向側に見ている私等は人夫の転ばないよう神に祈るより

外はなかつた。

この日の午後からバロメーターの針が悪くなつて、二時頃からごろごろと滝のような音がしてきた。獵師は「山鳴りがしてきたから風になる」という。風となつたら、人里を離れて六七里も山に入つた私等は進むも逃げるもならず、その運命は如何なるのであろう。とにかく獵師の先きになつて金山事務所へ急行した。

金山事務所へ着いてみると、小屋は壊れているようである。まずまず険悪になる天候の中に笹川君と私の失望落胆は名状すべからざるものがあつた。よく見ると煙突が二本僅かに出ていた。のぞいてみると中はいっぱいの雪で、とてもこの小屋に泊まれそうもない。獵師に荷物を途中に置いて急いで来るように合図すると、直ちにやつてきた。腕組をして考えた獵師は「ここは風の吹く所で建物が埋れていることは殆んどないのだが、今年のように雪の多いのは珍らしい」と驚いている。やがて煙突の中から這入つてゆき、暫くして出てきて「中は宿ることができ」といふ。一行はコスキで小屋の入口と思うところを一丈も掘つて漸く中に入つた。

頂上を極めるのだと思うと、今晚はうんと食うことにして紅茶もむ菓子も食う。洗面器を探して、中に水を張り火にかけて葛湯をつくる。「これで先生、羚羊さへとれましたらなあ！」と獵師はいう。

七、刻々に迫る死の痛苦

翌二日は午前一時頃、外へ出てみると星が鋭く光つていた。心も勇んで一行を起した。明方の月はほのかに小蓮華の方から上つた。「お月様が笠を被つてゐるから、今日は風かもしれない。午前中に頂上を極めなければならぬ」という。

四時半、金山事務所を発す。四面は薄暗がりであるが、小蓮華や鉢ヶ岳などはよく見わけられた。雪は凍つていて、一足ごとに物凄

【附記】 本稿は大正十年三月蓮華温泉を基点になされた積雪期における白馬岳スキー初登山の紀行である。原文は大正十年七月一日発行の中学世界第二十四巻第九号に発表されたものであるが、本稿は藤島玄氏が要約したものである。

る。内山氏は明治十八年新潟県岩船郡神納村に生れ、大正六年東京高師卒、当時富山師範学校教諭であつた。日本の登山史上からも非常に貴重なものである、その全文は、いずれ山岳にでもおさめておきたい。(山崎安治)



カッパは山下一夫氏

第三回

心泉亭有志晩餐会

土旺会に集まつた連中であつた新緑のころに有志晩餐会を開催したら如何だろうと云う話が出て早速当番を決めて一カ月ほど前から準備を進め、日時を決定し、会場は恒例の六義園心泉亭ということで案内状を差出し、ルームにも提示して来会者をお待ちしたところ、当日は当初の予定をはるかに越えて三十三名の盛況を呈したことは望外の喜びであつた。

昭和三十五年六月十八日(土)は梅雨晴の好晴に恵まれ暑気を覚えるほどであつた。折柄世相は陰悪で安保反対のデモで騒然たるものがあつたが当駒込六義園内は初夏の陽光に映えて折柄咲き乱れたサツキ、ハナショウブで彩られ閑静の中に定刻四時ごろより三々五々参集、五時ごろ恒例の記念撮影をすませて開宴、神谷当番の挨拶のあと、酒杯の回るうちに一同の自己紹介あり他所で何うことのできない珍談もあつて一夕の歡を尽して八時ごろ散会した。

当日は在京有志の外に鳥山さんは熱海から、牧野さんは静岡から

遠路来会され種々お世話になつた事を感謝するとともにこれまでもいつも来会された別宮、沼井両君が不帰の客となられて永久にその声容に接することのできなくなつたことに一まつ淋しさを思うもので、ここに近藤、高野、田部、冠さん等長老の方々が健康を維持され永く本会のために御指導あらんことを切望するものである。

五月二十一・二十三日の四日間て加賀の白山に登つた。

名須川 浩

春の白山

（順序不同）岡野徳之助、冠松次郎、芳野起夫、青木 昇、鳥山徳成、鶴岡元之助、田部重治、近藤茂吉、織内信彦、今井雄二、今井喜美子、山崎安治、牧野 衛、高木菊三郎、村井米子、佐藤隆太郎、瀬名貞利、中田勇吉、山崎金次郎、名須川浩、藤島敏男、松本熊次郎、関根吉郎、松本善二、村尾金二、吉田竹志、古沢肇、山下一夫、入沢文明、坂倉登喜子、網倉志朗、神谷恭、岩永信雄

当番 神谷 恭、岩永信雄
なお次回の当番は次の三氏に決定した。
関根吉郎、藤島敏男、太田 敬

(岩永記)

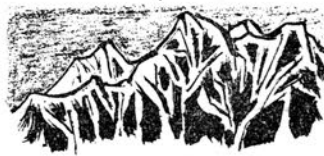
×

×

室堂では床下にたまつた水が凍りついて寒むぎむとした感じのところへ夕方窓外では小一時も雪が降り積りなかなか冷え込んだが、毛布と木炭が備えてあるので宿泊には好都合であつた。

効だつた。御前峰も大汝峰も頂上のすぐ横からスキーで降つた。標高一、七〇〇米の辺まで落差にして頂上から約一、〇〇〇米の間に尾根、谷、高原、緩急変化に富んだ斜面が続いて実に愉快な山スキーを楽しむことができた。

所跡より秋田街道を左に見て歩くうち、太平橋の手前で新旧道と分れるが、工事のため新道をゆく。やがて通りかゝつたトラクックに便乗、車輪一杯の道で胆を冷やす。この新道はいまのところ上の橋で行止り、旧道と合して徒歩三十分ほどで国見温泉につく。



会員通信

カットは上田哲農氏

秋田駒鳥帽子縦走

村上 金吾
太田 宏

私達と宇津木童男氏の同行三人、釜石発八時二十分の準急で盛岡へ、橋場線に乗換え雫石下車、バスは安栖まで、あとは徒歩。関

マクサは大焼砂より多い。湯ノ森を過ぎ笹森山との鞍部湿原で屋敷。笹森山頂を越してゆくと東側下方に待望の千沼ヶ原が伏かんされる。肩の分岐点で往復することにし、途中にザックを置いて高差約一五〇メートル距離約一、〇〇〇メートルの千沼ヶ原におりる。目測で約一〇〇ヘクタールの湿原に大小無数の池塘が散在している。発見者の長沢氏が六百いくつかまでは数えたが、あとは混迷して数えきれなかつたので、千沼ヶ原と命名したそう。沼にはイミズガシワ、ウキガヤなどが生え、周囲の湿原にはミズゴケ、モウセングケ、イワチョウウ、ニッコウキスゲ、キンコウカ、ミズギボウシ、サワギキョウ、ミズバショウなど

が見られる。千沼ヶ原はその名が示すように特異な存在で国の文化財としても重要なものと思われる。現に国立公園八幡平の地域に含まれているので、平倉沼と共に特別保護地区に指定して保護管理すべきでなかろうか。

千沼ヶ原から笹森と鳥帽子の鞍部に出る新道があるが、ザックを置いて来たので分岐点まで戻り、それから鞍部を経て十五時四十分鳥帽子岳（乳頭山）山頂に立つ。ガスが上り展望もきかないので早々にして蟹場へ下る。湿原田代谷を経て、五百羅漢の險岨をおり六時頃蟹場温泉着泊り。

翌朝八時四十分発田沢湖まわりのバスで帰途についた。蟹場温泉の上から小白森、大白森、大沢森、曲崎山、八瀬森、関東森を経て、八幡平から岩手山にいたる裏岩手コースの大深岳に連絡する新コースが営林署により開かれていたことを附記したい。

(三四、八、一八)

シャモニ便り

安田 実子

谷間の町も山も見えない八月十五日、ガイド祭の朝は霧雨の中に訪ずれました。早朝からフレンドは山姿で教会に。

ピッケルの儀式を見るために、

私たちが山を下りた九時頃、霧は強い風にどんどん飛ばされ、美しい秋晴れのような空に、新雪をまとつた山々が現われました。十時教会の前は人でいっぱい。その中をシャモニのガイドたちは、お揃いのブレザーを着て、ピッケルとザイルを持って行進して来ました。フレンドは、先頭から二番目、私たちに気がつかずごくすましていました。司祭様のお説教は言葉が十分に解らないためか、そんなにおごそかなものではないような気がしましたが、日に焼けた顔で威儀を正しているガイドたちの様子には、深い感銘を受けました。そのあとモリス・エルゾーグから新しい旗が贈呈され、山に亡くなったガイドの霊を慰めるためと、それからド・ソーシュールの像にグラフィオラスの美しい花束が捧げられました。

午後三時からはガイヤンの岩場で岩登りのデモンストレーションがおなじみの国立登山学校の先生、ガイドたちで行なわれました。ガイヤンは七〇メートル／＼八〇メートルの岩場です。よく見ようと、一時頃から行つて岩のすぐそばにいましたので、あとからつめかけた何千人もの群集に邪魔されずに写真をとれましたし、レビュファのアップミのテクニクなどもよく

見られました。レビュファの登り方、身のこなし方を見ていると、やつぱり彼は世界一のクライマーと云つた感じがすし、もつて生れた天性がものを云つているのがわかります。岩登りの説明はガイド組合長のフリゾン・ロッシュで上手な説明でした。ガイヤンの若いガイドたちの登りぶりとくらべ、一緒に山に行つた時のフレンドのたしかさと思うと、やはりフレンドは立派なクライマーだと、改めて思いました。秋晴れの美しい中に終つたガイド祭は、私たちにまたひとつの美しい思い出を与えてくれました。シャモニの生活は、実にロマンチックな、そして活気に満ちたものですが、心をいつぱいにしているだけで、なかなかフリゾン・ロッシュのようなわけには参りません。ではまた、お便り致します時まで、ごきげんよう。

(三四、八、近藤等宛)

五郎山、天狗山、男山

望月 達夫

避暑登山を唱える藤島氏を十一月二十二三日の連休につれ出したのだから、行く先には少々頭をひねつた。信州梓山までは避暑どころか、われわれも誘蛾灯に群がる蛾になつて満員の汽車・バスの御厄介になつた。ところが白木屋

で一服して宿を出た頃は登山者の姿さえ稀に、晩秋の屋近い陽がまねくふりそそぐのみ。常楽院平から左の沢に入つて暫くして左手の尾根にとりつく。路ははつきりしないが尾根伝いに五郎の頂に達し、帰路は少し南へ廻つて沢を下つた。

翌二十三日は大深山から天狗山男山と歩いたが、ここでも人に会わず、男山の下りは路がよくわからぬままに、見当をつけて下り藪こぎをししばらくやつて川平へ出た。二日共無類の快晴に恵まれ、十月の記憶もまだ新しい御座山や新雪の南北中央アルプス、八ヶ岳、秩父など終日あきるほど眺めることができた。五郎山は路が殆んどなく、西尾根は所々に岩峰があつて思つたより余程ワイルドな感じが強く、拾いものであつたのを喜んでゐる。

(三四、一一、二三)

小野子山と子持山

名須川 浩

藤島敏男氏、望月達夫氏および小生の一行三人で、二月二十七日、八の両日天候に恵まれて小野子山と子持山に登つた。知る人も少ないようなこれらの山も登つてみて上信越の山々の優れた展望台であることを知つた。

眺めた山を主なものだけ拾つても、皇海、日光白根、武尊、平が岳、宝川笠、谷川、万太郎、仙の倉、苗場、白砂、岩菅、横手、草津白根、四阿、浅間、榛名、赤城、などで、枯葉色の尾根が幾つか重なつた向うに一きわ高く白皚々たる連嶺を眺めていると一寸日本の山とは思えない錯覚に陥つた。

渋川から入り子持山に登り、小峠を経てその日は中山部落のよろずや旅館に一泊、翌日中山峠から小野子山、十二が岳に縦走して名久田に降つたのであるが、子持神社の先で新雪に薄化粧したシシ岩とそこから頂上に続く尾根を望んだ風景、子持の頂上を北に降りるカヤトの尾根からの上越国境の山々の眺望、おだやかな起伏の小峠、落つた静かな中山部落の宿、中山峠小野子山への藪こぎ、十二が岳までの急な登り降りなどが印象に残っている。

登山者といつたようなものは極めて少ないらしく、この二日間も全く出合なかつたし、頂上に登つても踏み荒らされたり、食べがらが散乱したりしている形跡が全くないのは嬉しかった。道もあつたりなくなつたり、藪の最も少ない時期と思うがそれでも藪こぎはかなりあつた。

雪は頂上附近の北斜面に若干ある程度で空気はよく澄み、カヤトの草いきれもなく、時期としても最もよい時期であつたと思う。

皇海山と古峯ヶ原

日 高 信 六 郎

どうも私は山に相当執念ぶかいほうらしい。昨秋は屋久島に渡つて五十年来の念願をはたし、今年は五月の連休に皇海山にのぼつて、木暮さんのお伴をして登る約束をはたせなかつた四十年まへの償いをした。それで結構たのしいのである。ところがまだ念願がた

くさん残っている。それを思うと楽しくもあり、それ恐ろしくもある。

庚申山から連峯をつたつて登る古い参詣みちが久しくすたれていたので、二三年まえ地元の人たちの努力で再開されてから、むかし木暮さんと登つた藤島君はじめ会員のかがたがたがかけられるのを見てはジツとしておられず、この辺の事情にぐわしい会員小野尚俊君を先達に、深田久弥、古沢肇両会員と出かけた。

早朝の東武電車で日光へ、それからバス。細尾峠で沢山のハイカーをおろし、桃、梨、桜が乱れ咲く谷をくだつて足尾につき、足尾山岳会々長の神山保治さんのお店

をたずね、山の話聞かせてもらつた上に名物のおいしいうどんを御馳走になり、町役場の新さんのお世話で車を走らせ、いまは廃坑になつて、全くひとかげがなくなつた小滝坑のあたりをぬけ、銀山平で車をかえし、庚申川に沿つて歩き出した。急崖があり滝があり八汐がさいてなかなか趣きがある。一の鳥居から山みちにかかる。途中ひどい雷雨におそわれたが、庚申山荘につく頃にはやんで、谷のむこう古峯ヶ原連山のうえにきれいな虹がかつた。

翌朝は六時に出かけ、奇岩の間をぬつて急登する。昨年の台風のためあちこちの崖がくずれ巨岩がおちて、霊山の巡拝路は閉ざされ、森林帯に入ると倒木が多くて悩まされた。天気はすこく晴れて、庚申山の頂に近づく頃から、近くは男体、袈裟丸、遠くは富士が見えはじめ、頂上から鋸岳まで十一の峯を上下する間にも、たえず四方遠近の雪をまといつた山々が眺められて、われわれを有頂天にした。皇海山はふかい松木沢を隔て、ガレと木立ちを装つて高くいかめしく聳える。今年はまだ雪が多くて、鋸山から稜線の急降下はかえつて助かつた。下り立つた鞍部から雪をふみ倒木をくぐつて、頂上についたのは午後二時半、こんなに時

間がかつたのは倒木と写真撮影のせいばかりではなかつたようだ。頂上から立木をすかして望む至仏のあたりはすつかり白かつた。

鋸山に戻つてから南西に稜線をつたうみちは左にサカイ沢の降路をわかつた辺からは踏みあとも覚束なくなつて、だんだん尾根が広くなると、森の中の笹をわけて見当をつけるのに骨が折れる。峠にいた頃には夕やみが迫つて来た。六林班峠と呼ぶのは以前に伐採がさかんな頃の名こりであるが、上州峠ともいわれ、足尾側ではこの峠の南北に対峙するコブを男山、女山と呼び、峠を妹背峠といつたことがあるようだ。

これから今朝越えた連峰の横腹を迂回する長い月夜道には雪が残りが荒れていて歩るきにくい。樺平からゆるい登りになつて、山荘に降りついたのは夜の十一時だつた。宿で心配して若いお客さんたちを迎えに出してくれたのには恐縮した。ずいぶん呑気ならしい山のぼりをしたものだ。しかし連休というのに、山中で一諸になつたのはエーデルワイス・クラブのご婦人連ひと組という静かな山を、わが物がおに一日じゆう歩るきまわつてたんのうしたのはうれしかつた。

次の日は昼すぎに立つてゆつくり足尾まで下り、その翌日は深田さんと二人で柏尾峠まで自動車、それから雑木林のゆるい起伏をブラブラと、皇海から白根、男体までの山なみを心ゆくまで眺めながら、庚申神社奥の院の三枚(味)石から古峯ヶ原高原までおりると、大ぜいのハイカーに出会つた。広いみちを古峯神社に出て、社頭の茶店で一服してバスにのる。鹿沼から東京へ、人にもまれ車にゆられてこの静かな山旅を終つた。

ニューヨーク便り

限 部 恵 子

もう一ケ年間も山という山へ足を踏み入れることも全くななくクサツて居ります。

昨年のウェストン祭での楽しかつたことをしみじみと思ひ出します。ニューヨーク生活も一年に近くなり多少マンネリズムです。でもまだ二年位はここに釘づけです。慶応のヒマルチュリ登頂、まことにおめでたく喜んでます。A・A・Cに行つても鼻を高くしています。

A・A・Cと云えば先日電話があつて、日本の遠征隊が携行した食糧が送られてきたが、何やらさっぱりわからないから是非来てほしいと云われて、行つて見ました。

そして驚いたり笑つたり、「お茶漬のり」のポリエチレン袋(六個入り)を一袋発見しました。A・A・Cの人達にわからなかつたのも無理ありません。明治大学の隊が持参したものという説明以外には何もなく困つていた次第です。おかげで、その晩はご飯を炊いて「如何に食するや」という実験をご披露させられてしまいました。

A・A・Cの中にはA・A・C・museum(小さなガラスケースにすぎませんが)があつて色々な資料が陳列されています。秘書のモナ嬢はこの「お茶漬のり」をそこに入れたものかどうか思案なげ首の態でした。A・A・Cは日本の装備に非常に興味を持つているようです。

明治の隊といえは交野様の隊かと思ひますが、今年はまた沢山の遠征隊が出ることでしよう。

(六月二十八日)

グリンデルワルドにて

中 屋 健 一

ストイリの娘に場所を教えてもらつて田口一郎の墓に行つてきました。帰りにエミールと酒を飲みながら一時間ばかり話をしましたが、彼七十二才というのに大へん元気でした。クライネ・シャイデクの土産物店のぞいていたら、

いきなり「お前は日本人だろう」というので驚きましたが、これがストイリの妹でした。こんなに日本人に人気のあるところは初めてです。(七月五日・本会あて絵葉書)



図書紹介

カットは上田哲義氏

滝谷

一九五九年十月十八日

東大スキー山岳部編

サブ・タイトルにあるとおり昨年の秋北穂高滝谷で六名の犠牲者を出した東大スキー山岳部の正式な遭難報告書である。

三部にわかれ、第一部は遭難報告、救援活動および事後処理、会計報告、反省会の記録、第二部は疲労凍死について、山岳気象の見地から、合宿登山について、新制大学山岳部の諸問題、登山の安全

性、第三部は故人の山歴、遺稿、追悼となつてゐる。

この報告を読んで特に感じたのは、戦前の東大山岳部の片鱗を知つてゐる私などにとつても、戦後の一特にこの数年来の東大山岳部というものが大きな変貌をとげていたということである。

戦前の東大山岳部というものはそれぞれの地方の旧制高校からすぐれた登山者が集り、楽しい、個性的な、しかも権威ある独得の雰囲気をも出しつゝいたのをおぼえてゐるが、今度のこの報告をよむと、いまの東大山岳部というのはそうした空気は全く見られなくなつてゐたようだ。その集団的な動きは、何かあせりといったようなものが多分に感じられるのは筆者一人だけなのであろうか。こうした点を木下雄氏は「新制大学山岳部の諸問題」ですどくつてゐるのは同感である。そこに論じられてゐる問題はまた東大ばかりでなく、現在の学生登山界全般の重大な問題でもある。各大学の学生諸君はすべからず本書を熟読すべきであらう。

なお一言本書について気がついたことをつけ加えるなら、そのアクシデントの直接の原因とも見られる雪崩について本書は一言も考察を加えてゐないのはふにおちな

い。(山崎安治)

昭和三十五年六月東大運動会スキー山岳部発行、三九〇頁、非売品

The Alpine Journal

Vol. LXIV. Nov. 1959 No. 299

巻頭にはマラーニの筆になる「ガシャールブルム第四峯」とわが桑原教授による「チョゴリザの初登頂」が仲よく肩を並べてゐる。ガシャールブルム第四峯は一九五八年八月六日イタリイ隊のボナッティとマウリによつて登頂されたが、ボナッティが、K2よりもむずかしかつたと述べてゐるのをみても、この登攀の困難であつたことがわかる。挿入の写真八枚はどれも素晴らしく、困難な登攀の模様をよく伝えている。

チョゴリザは省略するが、つぎにD・H・グリーンナルドの一行が一九五六年に行つたヒスパニーピアフ地域のスノー・レーク付近の小さな登攀の記事がある。一行はルクベ・ブラクとよばれる六〇三〇mばかりの峯の近くで雪男の足跡を発見してゐる。

困難な登攀を述べたものとしては、チョゴリザへ行つたK・ディームベルガーのアイガーの北壁(第十三登)とH・マキンズズのグランド・ジョラス(ウオーカー・バ

ットレス)があり、変つた地域の山としてはノルウェイやアフリカやエチオピアの山がある。

E. Echevarria C. によるチリーの中央コルディレラの一章には、スケッチマップ一葉の他に文献目録がついてゐるので、この付近をしらべる者にとつて見逃せまい。

アルパイン・ノーツ欄は例によつて読みがある。一々挙げていたらきりが無い。エクスペディション欄も同じだ。中国隊によるムズターグ・アータの登山(一九五九年)とかフランス隊のカフカズ(一九五九年)などが目につく。

追悼欄には古いヒマラヤニストのC・G・クロフォードや最近アマ・ダブラムで行方不明になつたG・J・フレイザー、M・J・ハリスの名が見られるほか、経済学者として著名なA・C・ピグー(一九五九年没)が(一九一三年以来)ACCのメンバーだつたことは、案外知られてゐないかも知れない。本文一四七頁写真二八葉。(望月達夫)

大ヒマラヤ展目録

同名の展覧会の目録、アート紙三十二頁、写真六十葉、一部百円。表紙は色刷、ヒマルチュリ頂上に立つ慶応の原田隊員。これ一冊読めばヒマラヤ通になれるほど各隊

の行動記録を中心に年代を追つてよくまとめられてゐる。

惜しいといへば同展に展示された、宗教、民俗、動植物関係のおびたらしい収集品の目録のないことで、これはぜひ記録しておきたかった。なお巻末の登山年表は本会報に付録として転載した。(F)

◇ルームの改装◇

監事 松本熊次郎氏寄贈により東隣に物置が増築され、二階集会所も塗装されて明るくなり、面目を一新した。また玄関の扉も新しくなつた。松本氏に厚く感謝の意を表したい。

会務報告

六月理事会及評議員会

二日ルーム

マ出席者 日高会長、理事浜野、折井、渡辺、太田、金坂、木下、田村、日下田、古沢、徳久、加藤、川上、評議員望月、青木、監事野口、松本、東京支部辰沼、西川、委任出席、評議員藤島敏男、今西寿雄、北川正次

マ議事と報告

①ウェストン祭の件(六月四日―六日) 日高会長、折井健一、加藤元一、榎名誉会員 佐藤久一朗氏出席予定
②支部長会議の件(七月九日)

- ③ 高校生を対象の夏期講習会
④ 会の書類は必ず総務を経由すること。対外的な往復文書は特に慎重を要する
⑤ 事務処理の改善について
⑥ 交通公社、スポーツニッポン、国鉄協会の夏期登山講習会の件
⑦ 新潟鉄道局登山講習会講師派遣依頼について、巻機山
⑧ 報知新聞社夏の山岳展後援の件
⑨ ルームに物置増築の件(約三坪)
松本監事の厚意により施工、体協の了解は折井常務理事が折衝
⑩ 故別宮前会長写真展の件
⑪ 富士山頂研究所の件(辰沼氏)
⑫ 台湾の山岳会よりの連絡について、五位名で日本の山に登りたい(日本からも五位名台湾の山へ来てもらいたい)
⑬ 山日記小辞典の件
⑭ 小集会を月二回開くようにしたい

七月理事会

七日ルーム

(望月評議員の送別をかねて)

- ▽出席者 日高会長、理事浜野、渡辺、折井、太田、山崎、金坂、村木、田村、日下田、高橋、川上、古沢、評議員望月、監事松本、東京支部石島
① 山岳協会業務報告(浜野理事)
② 避難防止委員会、山岳会三名、岳連側三名を以て構成

支部長懇談会

七月九日(土) ルーム

- 2 国体の件 役員は岳連に一任、本会から会長、渡辺理事出席予定。
3 技術委員会 岳連から斎藤、松山両氏出席
4 国体関係の事務 岳連側で処理、本会からは会長他一名出席の予定。
② 夏の旅(交通公社主催)東北朝日岳、穂高岳) 本会から講師派遣。
③ 高校生登山技術講習会の件 八月二日・六日、木曾駒ヶ岳
④ 関西学院大学ベル、アングス遠征について(次回説明を聞く)
⑤ 富士山高山医学研究所の件
⑥ イタリア、トレントに於ける山岳図書展出品について
1 マナスル 2 マナスル写真集
3 山川氏画集 4 岡田紅陽写真集
5 風見氏写真集 6 田淵氏高山蝶
7 山岳 8 山日記 9 日本アルプス(深田氏) 10 国立公園協会雑誌等
⑦ 上越山岳会登山講習会講師派遣について 戸隠山(来年一月)
⑧ 図書委員として、大橋晋、朝倉宏、近藤信行の三氏を追加委嘱の件 全員了承
⑨ 関西支部より
写真経緯儀による高山地帯の地上写真測量研究会に開催に関する依頼について

▽出席者

- 越後支部 藤島玄、斎藤平七、宮城支部 北川正次、山梨支部 三井松男、百瀬舜太郎、信濃支部 高山忠四朗、清水悟郎、富山支部 中田勇吉、石川支部 池田知幸、関西支部 津田周二、今西錦司、東京支部 西川益生、中島伊平、本部 日高会長、松方、三田副会長、浜野正男、折井健一、金坂一郎、山崎安治、川上隆、渡辺公平、日下田実、古沢肇、加藤元一、青木昇、神谷恭、辰沼広吉、永井清一
▽議題
① 日本山岳協会設立経緯並にその後の活動について(浜野理事)
② 技術指導講習会(冬山西穂)の報告 (金坂理事)
③ 高校技術指導講習会(木曾駒ヶ岳)について説明(日下田理事)
④ 登山教室開催賛助の件(毎日新聞、交通公社主催)(浜野理事)
⑤ 山岳、山日記、会報の報告 (折井理事)
⑥ 国体(熊本県)の報告 (浜野理事)
⑦ 入会金、入会の条件について (折井理事)
その他富士山頂研究所について辰沼会員が説明。第二回国立公園大会について、会長が説明をした。以上で予定の議事終了し、会長から挨拶、各支部長から各県各支部としての希望、並に報告があつた。続いて懇談会に移り、大分支部結成の機運濃厚なる報告あり。偶々同志社大学ヒマラヤ遠征隊の隊長津田君が帰朝し、岸田氏と共に立ち寄られ、挨拶と報告があつた。

東京支部報告

本年度役員任務分担

- 去る四月二十三日開催の会員総会に於て、昭和三十五年役員が左記の通り決定した。
東京支部長 松方三郎
委員長 折井健一
総務部 野田三郎
(事業) 安彦六郎、大屋健二、佐藤安男、芳賀孝郎、篠原敏弘、朝倉宏、(集会) 中島伊平、西川益生、(会報) 甲斐恒夫、(婦人部) 坂倉登喜子、三枝礼子、(会計) 宇田川允敏、(庶務) 山口節子
監事 山下一夫、石原憲治
評議員 神谷恭、沼倉寛二郎、村井米子、川森左智子、今井喜美子、辰沼広吉、今井嘉道、村山雅美

会務報告

- 四月六日 理事会
① 三十五年度役員改選の件

② 岳連脱退の件

- ③ 臨時理事会開催の件(四月十三日)
④ 三十五年度役員総会開催の件(四月二十七日)
⑤ 四月会員集会の件「安全救急法」荒木寿太郎氏
四月二十七日理事会

① 役員分担の件

- ② 監事、評議員推選の件
③ 支部発足十五周年記念行事企画委員決定の件(折井、野田、安彦、坂倉、中島、三枝、山下)
④ 新旧役員総会開催の件(五月十一日)
⑤ 五月会員集会の件「南極のお話とスライド」芳野越夫氏
六月一日 理事会

① 西武デパート夏山相談所開設の件

- ② 今後の懇親山行その他予定
(六月) ウェストン祭参加
(八月) 懇親山行「東北」(八月末) ヨーデルを聴く会
(十月) 木暮理太郎翁記念祭(十一月) 懇親山行

③ 個人山行の状況報告

- ④ 六月会員集会の件「ヒマルチュリ偵察隊のスライドとお話」

▼お知らせ

- 東京支部では、毎月第三水曜日に、いろいろなテーマを持つて会

員集会を行っています。皆様お誘い合わせの上、何卒お集り下さい。

(午後六時より、於ルーム)

又、今後の懇親山行その他の予定は左記の通りです。

八月―懇親山行(東北方面、L、野田)

八月末―ヨードルを聴く会
十月―木暮理太郎翁前祭
十一月―懇親山行(L、西川)

関西支部報告

梶本徳次郎

関西支部総会は五月二十五日夕、大阪スポーツマンクラブに開会、三十五年度も津田支部長のもとで前年とほとんど同じメンバーが、もう一年役員を担当していくことにきまりました。参会者、約四十名。

△西岡一雄老の「回顧五十年」という明治、大正、昭和へかけての珍しい登山風俗、思潮史を聞くことができました。

△藤本高嶺氏(九三氏の三男、朝日(大阪)写真部員)のカラーズライド「日本の山の四季」一月から十二月までの山々の四季の美しさ約二百枚を見せていたゞき楽しい集りでした。

(五月二十九日)

信濃支部報告

ウエストン祭を終えて

信濃支部 清水悟郎

山との出会い、また、山を通じてのひととの出会い、浄福と言おうか、法悦と言おうか、ほとんど宗教的なまでの幸福と歓喜、そうした満ち足りた幸福感にひたることのできた今年のウエストン祭は、今までに例を見ないほど成功したものであった。

参加者は、日高会長始め、横・尾崎・藤本・岡村・佐藤・串田・横内・村井・折井等岳界の指導者、関西支部長、山梨支部長、信濃支部員約三十名、一般参加者三百余名、それに珍客として石田吟松氏(ウエストンと有明登山で同宿し、ウエストンの著書の中に

も出てくる日本画家)の顔も見え、

それぞれに初めて見知った人のように謙虚に、また再会を喜ぶ百年の知己のように心を許して語りあう山懐の風景は、それ自身美しい人生の断面図であった。そこには、人間が一切の虚飾を捨て、原初の姿において対面するような正直さと信頼関係が漂い、それに和するよう雪解けの深間の水はせせらぎ、樺の梢には小鳥がさえずるのであった。その時、神河内は正しく靈気に満ちた神域であり、神秘と永遠は如実にそこにあつた。こうした雰囲気の中で、碑前祭・記念講演が行なわれたが、折からの雨も一向にいとわしいものとも感ぜられず、天来の打水に洗われ、人々は心身ともに一そう清められる思いに満ちているごとくであつた。

ウエストンが初めてこの地に入

つて七十年、世を辞して二十年、ウエストン祭は回を重ねること十四回、混沌と偽善の世に、人々の山に寄せる思いはいよいよ募つて、山々への道は年々に開かれてきたが、山はいよいよ高く、いよいよ遠いもののようにならぬ前に天を凌いで立つ。これを仰いで、人々はこの偉大な先人への恩慕を新たにしながら、それぞれに幸福な山日記を綴つたことであろう。来賓・講師の先生方に支部として深く感謝を捧げたい。

ウエストン祭行事としては、例のとおり碑前祭・記念講演会・記念山行(西穂)・神河内自然観察と探勝・山の歌講習を行なつたが、別に日高会長・横・尾崎夫妻・岡村・佐藤の諸先生を鈴蘭まで御案内した。その間、来年度は特にウエストン生誕百年を記念するような行事を企画したかどうか、日本山岳会としてどこかへ山小屋を建てたいなどという話も出たことを付記する。

なお、支部は目下、日本アルプス観光連盟主催、交通公社等後援の登山教室(七月中旬、延十二回)の指導を委嘱され、その準備中である。これについては後日改めて報告したい。

(六月十八日)

北九州支部報告

橋本三八

昭和三十六年度集会を五月二十九日午後一時、八幡市皿倉山青少年訓練所で開いた。当日は朝から激しい雨であつたが長崎、佐賀の会員、県内久留米、福岡市から二十名が参集して楽しい会合であつた。自己紹介から協議に入り、橋本評議員の司会でまず支部今後の行き方として福岡県内会員も五十名近くに増加してきたので福岡支部に改組したらどうかねてからの会員の声について提案があつた。この提案に対し、長崎、佐賀の会員から反対があり、それよりも全九州地域の会員を総括して九州支部に発展させてはという意見について福岡県下の会員も賛成多く、JAC地方会員はセクシヨナリズムにとらわれることなく親睦を主として行くべきであつて、狭い九州地区を分割するような(全九州会員は百名足らず)小さい考えを捨てて一体化するよう熊本支部にも働きかけるべきである。本部からもその点推進をして貰いたい。ということこの提案は否決された。

そのあと懇談会に移り、岡田支部長の懐旧談、千島の山の話などがあり、最近の登山界の話も出て

FOUNDED 1905



日本山岳会
JAPANESE
ALPINE CLUB

前号会報所載、アメリカオレゴン州
ポートランド・マザマ・クラブへ贈ら
れたプラーク(飾り板)の拓本・原寸
145×160 mm 桜材(佐藤久一郎氏作)

午後三時半散会した。なお次回は秋に九重付近で開きたいという多数の希望があつた。

小集会記録

第二〇三回 六月二十二日(水)

講演 西北ネパールの旅

講師 川喜田二郎氏

参会者 四十二名

第二〇四回 六月二十九日(水)

講演 雪男探険隊報告

講師 大塚博美氏

参会者 六十二名

第二〇五回 七月五日(火)

講演 南極越冬の話

講師 村山雅美氏他

参会者 二十六名

第二〇六回 七月十二日(火)

講演 ベル・アンデス

講師 竹田吉文氏

(講演要旨別記)

参会者 二十名

第二〇七回 七月二十六日(火)

講演 台湾の山

講師 西丸震哉氏

昨三十四年十月二十二日から本年一月十九日まで、台湾省山岳協会の招へいを受けて渡台、現地山岳協会とともに、①次高連山、②南湖大山、③台湾一周と紅頭嶼、④奇萊主山連峯、⑤新高連山の五次にわたる登山旅行を行ったときの体験談を美しいスライドと

ともに興味深く話された。

戦後珍らしい台湾山岳の話であつたが、折柄の猛暑と、それに山へ出かけた会員も多かつたせいから、参会者が少なかつたのは講師に對してお気の毒であつた。

なおこの六月、薩南諸島(黒島、硫黄島、竹島)へ行かれたときの模様についてもスライドにより解説された。参会者八名

小集会講演要旨

七月十二日

ベル・アンデス

講師 竹田吉文氏

私も山に興味を抱く以上いつかは、ヒマラヤに行きたいと念願しているが、なかなか実現しそうもないので、しばらく時を移す意味でベル・アンデスを研究する事にしてみた。ところがこの方面の事をいろいろ調査している内に、いつの間にか神秘と奇蹟に富むインカ及びプレ・インカ文明に魅せられて、一昨年、昨年と二回もペルーを訪れる始末になつてしまつた。

誰もが経験された如く、処女地もしくはそれに等しい地域に足を踏み入れる時の苦労は実は大変なものである。御承知の如く、日本

にはアンデスの地図どころかペルー全土の地図すらもなく、外国の文献を読んでも、その山が一体ペルーの北部にあるのか、南部にあるのかさえ判らず、全く雲を掴むにも似た頼りない有様であつた。

ところがハーバード大学、ドイツ山岳会、インスブルク大学等かつてこの地方を訪れた事のある連中と連絡がとれるに従つて、その輪郭が鮮明に浮び上がりそれどころか、目的地の写真や予想ルート図さえも入手する事ができたのである。遠征が実現するまでに約五年間もの準備を必要としたのだから、実に長い道のりであつた。しかし考えてみれば、日本とは丁度地球の反対側にある南米に行くのだから、無理もなからう。

ハーバード大学とドイツ山岳会からの好意ある忠告で、私達はペルー・アンデスの目標を、かつてインカ帝国の都として栄えたクスコより更に東へ三百軒、すなわちボリビア領にほど近いヴィルカノタ山群の盟主「アウサンガテ南峯」を選んだのである。

この山はインカの皇太子とも呼ばれた、クスコの守護神アオキが住むと伝えられる伝説の山であつた。アウサンガテの主峯(六、三八四メートル)は、既に一九五

三年スタイン・メッツ等による独逸合同隊によつて登頂されているが、私達の選んだ南峯(六、二〇〇メートル)は、今までに独逸、英、伊、米等の遠征隊が前後五回も試みたが、成功を許さなかつた処女峯である。

一九五八年八月私と堀内隊員からなるたつた二人の偵察隊は、現地側と受入交渉をするためにペルーに渡航し、政府、日本大使館、在留邦人との間に折衝をすませ、なおアウサンガテ周辺の奥深く踏査し、来るべき本隊のためのルート偵察、土民の慣習、現地購入可能な物資、キャラバンの編成準備等に貴重な資料を持ち帰つたのである。

翌一九五九年六月、六名の隊員は空路と陸路に分れて日本を出発し、一先づペルー空軍の特別機にて古代インカ遺蹟の空中調査を行い、続いてヴィルカノタ山群に向つた。此の間ペルー政府はもとより、日本大使館、在留邦人会から文字通り熱狂的な歓迎を受ける事が出来たのは、実に大きな喜びであつた。

終始、落雷を伴つた降雪に悩まされたながらも遂に、八月十四日処女峯アウサンガテ南峯の初登頂に成功し、次いで十六日には南峯より東にある無名の処女峯登頂にも

成功しこれを「ピコ・デ・アロス(お米の山)」と命名した。

微力な私達が南米六、〇〇〇メートル級の処女峯に、日本隊として初の登頂に成功出来得たことは、天候の幸運、ハーバード、ドイツ山岳会の資料が大きな原因であり、また、各方面から寄せられた力強い援助により、この喜ばしい成功をから得たものと感謝している。

無事下山してリマの日本大使館の祝賀パーティの際、三浦大使から「竹田君、君にすばらしいお祝いを差し上げよう」といわれ私の手に渡されたものは「アウサンガテ登頂の成功を祝す」というJACよりの祝電であつた。このような嬉しい祝電は、私をはじめ隊員一同が今までに経験したどの電報にも優る大きな喜びを与えてくれたのであつた。

高校生登山技術講習会

日本山岳会、全国高体連、駒ヶ根市主催、長野県教育委員会、毎日新聞社後援により、八月二日から六日まで五日間、木曾駒ヶ岳、空木岳を中心として開かれ、本会から日高会長、浜野理事他三十一名が講師として参加、指導に當つた。

「日本人の記録による
大ヒマラヤ展」開催

本会並びに毎日新聞社主催による「ヒマラヤ展」は七月二十三日（土）―八月二日（火）、東京池袋西武百貨店に於て、五百坪の大ホールを会場として開催された。

千九百年にチベット入りを志してヒマラヤの峠を越えてラッサに至つた河口慧海師をはじめとして現在に及ぶ「登山にも科学的研究にも大きな歩みを見せている」日本人の記録による数々の貴重な資料を一堂に集めた空前のこの展覧会を見る人の眼を奪うに十分であつた。

開会当日には午前中に義宮殿下も御覧になり、また午後には秩父宮妃殿下もお越しになり、別室にて妃殿下を囲み開会記念パーティーが開催され、展覧会の関係者として会長、両副会長、冠、楨名誉会員をはじめ多数会員が出席し、先駆者たちの業績をしのび歓談した。

なお来日中の中華民国台湾省山岳協会常務委員 王登火氏も出席された。

ヒマルチュリー登山隊費報告

(34. 12. 25)

	支 出			入 金	
	先 遣 隊	本 隊	計	寄 附 者 芳 名	金 額
装 備	336,466	1,461,634	1,798,100	日 本 大 学	1,000,000
食 糧	75,966	173,664	249,630	東 北 電 力(株)	300,000
酸 素	3,840	331,100	334,940	近 藤 茂 吉 氏	10,000
貨 物 輸 送	3,000	171,462	174,462	東 亜 燃 料(株)	50,000
医 薬	6,535	20,998	27,533	銀 行 協 会	1,000,000
観 測 通 信	0	69,150	69,150	阪 東 ゴ ム(株)	10,000
梱 包	14,640	272,260	286,900	大 賀 道 昭 氏	1,000
写 真	0	160,010	160,010	(株)三 越	116,300
土 産 品	0	188,430	188,430	文 部 省	2,000,000
保 険 料	60,000	240,000	300,000	損 害 保 険 協 会	150,000
雑 費	8,400	623,106	631,506	生 命 保 険 協 会	200,000
外 貨 購 入 費	740,658	3,496,755	4,237,413	出 光 佐 三 氏	1,000,000
外貨裏付円払交通費	339,312	1,658,801	1,998,113	毎 日 新 聞 社	5,136,100
事 務 費		915,751	915,751	在 外 各 位	374,832*
				早 川 種 三 氏	3,706
				有 楽 フ ー ド	20,000
				セ ン タ ー (株)	
計	1,588,817	9,783,121	11,371,938		11,371,938

使用外貨内訳

(34.12.25)

* 内 訳

	(1958年) 先 遣 隊	(1959年) 本 隊
	740,658円	3,496,755円
	9,617.25 RS	45,685.88 RS
滞 在 費	1,183.37 RS	7,292.46 RS
印 度 旅 行 費	584.80	1,341.91
荷 物 輸 送 費	720.15	7,123.67
シ ョ ー ル バ ー 費	1,945.50	9,915.50
ポ ー タ ー 賃 金	1,908.16	9,748.10
通 信 費	400.00	800.00
通 信 費	367.34	2,511.86
食 糧 費	476.44	1,268.00
キ ャ ラ バ ン 費	246.95	2,050.00
雑 費	1,784.54	3,634.38
計	9,617.25 RS	45,685.88 RS

(外貨裏付円払ハ総テ船、航空、貨)

門 脇 季 光 氏	\$ 100	島 津 久 大 氏	£ 7.5	徳 永 太 郎 氏	\$ 50
倭 島 英 二 氏	" 100	杉 浦 徳 氏	£ 5	吉 岡 範 武 氏	" 50
結 城 司 郎 次 氏	" 20	鈴 木 九 万 氏	" 10	石 黒 四 郎 氏	£ 10
太 田 一 郎 氏	£ 7	萩 原 徹 氏	\$ 50	土 田 豊 氏	\$ 50
在 米 大 使 館 有 志	\$ 47	小 長 谷 緯 氏	" 50	千 葉 皓 氏	" 25
木 村 四 郎 七 氏	" 30	磯 野 勇 三 氏	£ 10	河 野 達 一 氏	\$ 100
奥 村 勝 蔵 氏	" 100	三 浦 和 一 氏	" 30	以上邦価換算	
大 江 晃 氏	£ 10	深 井 竜 雄 氏	\$ 20		374,832円

ヒマルチュリー登山隊費報告

1958～59 年、本会が送つたヒマルチュリー登山隊費の報告については本誌上を以てもつと早く御報告すべきところ、甚だ遅くなり、係として申訳なき次第である。(成瀬岩雄)

ヒマラヤ登山年表について

大ヒマラヤ展に際し、深田さんのピンチ・ヒッターとして簡単に年表を纏めてみた。そしてまとめてみて始めて気のついたことは、一九〇〇年河口慧海師のチベット入国後六十年の間に実に三十八の隊が延一八八人であつたといふことである。一九五七年頃迄は一年に一、二隊であつたものが、五八年五隊、五九年六隊、六〇年八隊とこの三年来ヒマラヤ・ブームも本格的になつてきた感がある。

尚この年表の作成に当り純然たる登山隊はその期間を内地出発から帰国迄としたが、現地に於て旅行を試みた場合には、その山行期間のみをとり、更に仏教研究にラッサへ入つた高僧の場合には、ラッサでの修業期間を省略し、ヒマラヤの峠越のみを、その期間とし記事中にその行動をや、詳しく書いた。この点多少の矛盾もあるが御許し願いたい。尚戦争中に軍の命によつてヒマラヤの峠を越えた人も二、三いるが、こゝでは対象が登山年表であり、やゝ目的が異なるので省略した。

尚本表の作成に当り、会員神原達氏の資料に依るところが大きかつた。

(松田雄一)

ヒマラヤン・ニュース

◇ガネツシュ・ヒマール 英国のP・J・ウォーレス氏は五月三十一日ガネツシュ・ヒマール(七、四〇六米)の単独登頂に成功した。この登山にウォーレス氏はシェルパ二人を同行しただけである。ガネツシュ・ヒマールは一九五五年スイスのランペール隊につぐ第二登だが、ウォーレス氏は一九五八年アンナプルナ第一峰に単独登山を試みている。なお同氏は一九五五年ランペール隊と同行して転落死したスイスのエリック・ゴージエ隊員の死体を発見した。

◇デイスティギル サール カラコルム・ヒマラヤの未踏峰デイスティギル・サール(七、八八五米)に挑んでいたウォルフガング・シュテファンを隊長とする五名のオーストリア隊は六月九日デセル・マルカード、ギンター・シュタルカーの両隊員が酸素なしで登頂に成功した。同峰は昨一九五九年スイスのランペール隊が挑んで失敗している。今回のオーストリア隊は五月六日登山を開始しCIを一九三〇〇呎、CIIを二二、一〇〇呎、CIIIを二三、七〇〇呎に駆け一気に登頂に成功した。なおマルカードは年令僅か二十才。ヒマラヤのサミッターとしては最年

少とみられる。

◇マツシャール主峰

カラコ

ルムの未踏峰マツシャール主峰(七、八一一米)に挑んでいた米、パキスタン合同登山隊は同峰の登頂に成功したと七月二十日ラウルピンディに報告があつた。初登頂者はパキスタン陸軍のジャブト・アクバルカーン中尉と米国隊員三名、その一人リチャード・マクゴアン氏は帰途途中日本に立寄つた。

(山崎安治)

本号主要目次

- 一 木暮理太郎翁碑前祭……………
- 一 金山詣で……………
- 二 ヒマルチュリより帰つて……………
- 三 大ヒマラヤ展を見て……………
- 四 「ブーム」と自然保護……………
- 四 第二回国立公園大会……………
- 五 山小屋の女あるじ……………
- 六 雪の北アルプス横断記……………
- 八 第三回有志晩餐会……………
- 八 春の白山……………
- 八 会員通信……………
- 八 秋田駒鳥帽子縦走……………
- 八 シャモニ便り……………
- 五郎山・天狗山・男山……………
- 小野子山と子持山……………
- 皇海山と古峯ヶ原……………
- ニューヨーク便り……………
- グリーンデルワルドにて……………
- 二 図書紹介……………
- 二 会務報告……………
- 二 支部便り……………
- 三 小集会記事……………
- 四 ペルー・アンデス……………
- 六 ヒマルチュリ隊決算報告……………
- 六 日本人の記録による……………
- 九 ヒマラヤ登山年表……………

会報投稿規程

- ◇会報に原稿をお送り下さい
- ◇次の原稿締切、九月二十日
- ◇用紙は15字詰を御使用下さい
- ◇用紙御希望の方はお送りします

編集後記

会報は雑誌のようになってはいけないと思ひます。会の動きや、会員の動静が速報されるところに大きな意味があるのだと思ひます。その点からこんどの会報は、新入会員紹介も、新着図書紹介もまた会員の勤務先、住所の変更などについてもお知らせすることができなくなつて、内容が不均衡なものになつたことを遺憾に思ひます。次号から追々改めていきたいと思ひます。また会員通信その他主要な記事で、編集の都合から掲載の遅れていたものを掲げました。時機を失した点についてお詫びします。

会報についてどうぞ忌憚のない御意見をお寄せ下さい。誤植、誤記などについても御指摘下さい。次号で訂正するようにします。

今年の夏はひどい暑さでしたが前任者で大先輩の山崎安治氏から編集をやつてゐるとさばつたが、おつかなびつくり山へ出かけ、あたふたと帰つてきてまた校正の筆を執るという悲しい有様でした。

昭和三十五年八月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円

電話 神田(四)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂堀池五番地

印刷所 株式会社 技報堂

年 号	名 称	記 事
26. 1959. 8~11	ダウラギリ二峰偵察	〔慶大登高会=加藤喜一郎(隊長)、宮下秀樹、石原襄二、神戸常雄〕 アンナプルナ二峰の計画を切換えてダウラギリ二峰の北面を踏査した。
27. 1959. 8~12	ランタン・ヒマール	〔飯田山岳会=山田哲雄(隊長)、松島信幸、新井均、寺畑哲朗、北城節雄、笠井亘(報道)〕 主峰のランタン・リルンは中止したが、サルパチョメに10月25日初登頂した。
28. 1959. 8~12	ガウリサンカール・ギャチュンカン偵察	〔福岡大学=加藤秀木(隊長)、阿部盛明、尾石光治) 日本人にとって未知の東ネパールに初めて入ったが、連絡が悪かったため、遭難誤報で一時大分さわがれた。
29. 1959. 10~12	シッキム・アッサム 学術調査	〔木原均(隊長)、中尾佐助、吉葉健二、三木敏之、田中伍〕 アッサム、シッキム(レプチャ)で植物学並びに遺伝学的調査を行った。
30. 1959.11~ 1960.3	ソロクーンブ(雪男 学術探検隊)	〔日本雪男研究グループ=小川鼎三(隊長)、林寿郎、山崎英雄、大塚博美、依田孝喜、尾崎陽一郎(カメラマン)〕 冬のソロクーンブ地方の雪男探査を行つたが降雪不足のため雪男は見つからなかった。しかしエベレストを初めてする素晴らしい写真をもたらした。
31. 1960. 2~6	ヒマルチュリ	〔慶大登高会=山田二郎(隊長)、田辺寿、宮下秀樹、中沢公正、村田茂、高塩統、大森弘一郎、川田善郎、原田雅弘、木村勝久(カメラマン)〕 南面ムシコーラよりウェスト・ピークを経て頂上に向い好天に恵まれて5月24日、田辺、原田、25日、宮下、中沢により、初登頂に成功した。
32. 1960. 2~7	ア ピ	〔同志社山岳部=津田康祐(隊長)、平林克敏、江上康、寺坂元雄、植西武司) ネパール、インド国境カリ川沿にベース・キャンプに入り、5月10日、平林、ガルツェン同11日津田、寺坂により登頂に成功。
33. 1960. 2~7	ジュガール・ヒマール 主峰、ビッグ・ホ ワイト・ピーク	〔東海山岳連盟=伊藤久行(隊長)、岩瀬正次、二木節夫、石原国利、加藤幸彦、春田金徳、稲垣恒夫、羽田栄治(報道)〕 主峰の登頂には失敗したがガルツェン・ピーク、マジヤ・ピーク(中央峰)の登頂には成功した。
34. 1960. 3~11(予定)	ネパール	〔早大アジア学会=神原達〕 パブリック・サイエンス・カレッジの留学生としてカトマンズに入り、カトマンズ滞在中、ポカラよりヒマルチュリB・Cまで旅行した。更に今秋シエルパの研究にソロクーンブ地方へ入るべく現在準備中。
35. 1960. 4~8	東大インド植物調査 隊 シッキム植物調査	〔東京大学=原寛(隊長)、富樫誠、村田源、津山尚、金井弘夫、和田格〕 日印共同植物調査隊として入国の難かしいシッキムに入り、大略、鹿子木氏のルートに従いゾンリに達し、帰路はシンガリラ尾根を経由してダージリンに帰った。植物約3,000種を採集。
36. 1960. 5~10	ノシャク(アフガニ スタン領パミール)	〔京都大学=酒戸弥二郎(隊長)、吉井良三、沢田秀穂、広瀬幸治、酒井敏明、岩坪五郎〕 パミール高原の学術調査を主とし、あわせてアフガニスタンの最高峰ノシャク(7,490M)の初登頂をねらうべく現在行動中。
37. 1960. 6~9	ソ連領パミール学術 調査	〔東京農業大学=守屋喜久夫、都留勝利、大石正和、風祭和夫〕 日本からの初めてのソ連領パミール行である。同隊はオーシュよりスターリン峰周辺に入り、氷河地形の研究、農業技術の調査を行うべく現在行動中。
38. 1960. 8~11(予定)	デリオ・チバ(パン ジャブ、ヒマラヤ婦 人遠征隊)	〔ジャパン・レディーズ山岳会=細川沙多子(隊長)、浜中慶子、原欣子、岡部みち子、杉浦耀子、奥川雪江〕 日本人として初の婦人のみによる登山隊として、日印文化協会の支持を得てパンジャブ・ヒマラヤへ出かけた。目標はデリオ・チバ、モンスーン後に登頂すべく現在行動中。

〔大ヒマラヤ展目録よう転載〕

年 号	名 称	記 事
12. 1954. 3 ~ 6	マナスル (第二次登山隊) ガネッシュ・ヒマール	〔日本山岳会=堀田弥一 (隊長)、谷口現吉、辰沼広吉、村山雅美、加藤喜一郎、山田二郎、村木潤次郎、大塚博美、山崎英雄、松沢幸雄、松田雄一、日下田実、竹節作太 (報道)、依田孝喜 (カメラマン)〕 サマ村にて住民の妨害にあい、マナスルは中止して、ガネッシュ・ヒマールに転進、試登して、6,350M に達した。
13. 1954.6 ~ 1957.8	アッサム調査行	〔中根千枝〕 インド滞在中前後三回に亘りアッサムの未開民族調査を行った。
14. 1955. 5 ~ 9	カラコルム (学術探検)	〔京都大学=今西錦司 (カラコルム支隊長)、松下進、加藤泰安、藤田和夫、中尾佐助、林田重雄 (カメラマン)〕 カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊 (木原均隊長) の支隊として、ヒスパー、ビャフォ、バルトロの各氷河等カラコルムの氷河を日本人として初めて踏査した。
15. 1955. 5	マナスル調査隊	〔日本山岳会=西堀栄三郎、成瀬岩雄〕 サマ事件の事情調査とネパール政府の確約を得る目的を以つてカトマンズへ派遣された。
16. 1955. 9 ~ 12	マナスル (第三次登山隊先遣隊)	〔日本山岳会=小原勝郎 (隊長)、村山雅美、橋本誠二〕 サマとの友好関係樹立ならびにマナスル登路を偵察のためマナスルにでかけた。
17. 1956. 2 ~ 7	マナスル (第三次登山隊)	〔日本山岳会=榎有恒 (隊長)、小原勝郎、今西寿雄、辰沼広吉、千谷壮之助、加藤喜一郎、村木潤次郎、大塚博美、徳永篤司、松田雄一、日下田実、依田孝喜 (カメラマン)〕 正攻法でマナスルに迫り、5月9日、今西、ガルツェン、同11日、加藤、日下田により初登頂に成功、宿願の8,000M 峰の登頂をなしとげた。
18. 1956. 6 ~ 12	ブリアン・サール試登 (パンジャブ・ヒマラヤ)	〔京大探検部=パンジャブ大学合同探検、藤田和夫 (隊長)、本多勝一、吉場健二、ベグ (隊長)、シャーカット・アリ、イナム・ウラ・ハーン) 京大学術探検隊のブランクを占める地域を踏査し、ブリアン・サールの試登を行った。
19. 1957. 5 ~ 9	スワート・ヒマラヤ	〔京大探検部=パンジャブ大学合同探検、松下進 (隊長)、本田勝一、荻野和彦、岩坪五郎、沖津文雄、ベグ (隊長)、ザフル、ムバシャー) スワート及び東部ヒンズークシを前年に引続き調査し、この方面の調査を完成した。
20. 1958. 3 ~ 6	ジュガール・ヒマール、ランタン・ヒマール探査	〔深田久弥 (隊長)、山川勇一郎、風見武秀、古原和美) ヒマラヤを楽しく旅行し、この方面の貴重な写真、絵画等をもたらした。
21. 1958.5 ~ 1959.1	西北ネパール 学術探検	〔川喜田二郎 (隊長)、小方全弘、西岡京治、並河治、高山竜三、曾根原恵夫、飯島茂、大森栄 (カメラマン)〕 西北ネパール未踏査地域の主として民族調査を行い鳥葬をはじめとする貴重な体験を得た。ムクト・ヒマールの一峰に登頂したが目標としたカンジロバ・ヒマールには取付けずに終つた。
22. 1958. 5 ~ 9	チョゴリザ	〔京大学士山岳会=桑原武夫 (隊長)、加藤泰安、藤平正夫、山口克、脇坂誠、中島道郎、平井一正、高村泰雄、岩坪五郎、芳賀孝郎、今川好則 (大使館通訳)、潮田三代治 (カメラマン)〕 完璧なチーム・ワークのもと8月4日藤平、平井の両名により初登頂に成功した。
23. 1958. 7 ~ 11	ヒマルチュリ先遣隊	〔日本山岳会=金坂一郎 (隊長)、石坂昭二郎、ヒマルチュリ東尾根の偵察を行った。〕
24. 1958. 6 ~ 11	ブータン・ヒマラヤ	〔中尾佐助〕 ブータン王室から招かれて単身ブータンに入り、広くブータン各地を歩き、植物採集を行った。クーラ・カンリーにも南から接近して貴重な写真を撮った。
25. 1959. 2 ~ 7	ヒマルチュリ	〔日本山岳会=村木潤次郎 (隊長)、松田雄一、石坂昭二郎、田辺寿、竹田寛次、山野井武夫、住吉仙也、木村勝久 (カメラマン)〕 前年の先遣隊に続いての本隊。長大な東尾根にキャンプを進めて頂上直下の大氷壁に取付いたが、悪天候のため7,400M にて敗退した。

日本人の記録によるヒマラヤ登山年表

松田雄一編

年 号	名 称	記 事
1. 1900. 5~7	ティーゼ・ラ越え (ネパール)	〔河口慧海〕 チベット入りを志して1987年6月神戸を発つ。1900年5月~7月の間カリガンダキ上流のティーゼ・ラ (5,200M) を越えてチベットへ入り、9月マナサロワル湖を経て1901年3月17日ラッサに入る。 1902年5月ラッサを発つ、7月3日ダージリンに帰つた。日本人として初のヒマラヤの峠越えを行つた。
2. 1908. 6~11	新疆、カラコルム・パス越え	〔大谷探検隊=橋瑞超、野村栄三郎〕 北京より蒙古に入り、更にアルタイ山脈を越え新疆入り、10月ウルムチに達した。その後ロブノールを探索コンロン山脈の各地を調査し、カルガーリクからカラコルム・パス (5,650M) を越えて、11月7日スリナガルに達した。日本人として初のカラコルムの峠越えを行つた。
3. 1912. 9~12	チベット入り	〔青木文教〕 1912年9月グム発、スキア路によりチベットに入り、1913年1月ラッサに達した。
4. 1913. 7	チベット入り	〔多田等観〕 ブータン経由チベットに入りラッサに達す。
5. 1918. 10~11	カンチェンジュンガ 偵察	〔鹿子木員信〕 ダージリンよりゾングリを経てグイチャ・ラを越え、タルン氷河に入りカンチェンジュンガを偵察せんとするも吹雪により退却。帰路黒カブア峰を登攀して、ダージリンに帰つた。
6. 1927.5~ 1928.10	カイラス巡礼並にナ ンガパルバット偵察	〔長谷川伝次郎〕 1925年に渡印した同氏は1927年5月~8月の間、カリ河よりマナサロワル湖、カイラスを巡り、帰路アンタ・ダウラ・パスを越えてゴリガンを下りアルモラにでた。更に翌年5月カシミールに遊び8月ナンガパルバットの偵察に向い、ゲンボルの屋根に達し、ナンガパルバット南西面の貴重な写真を撮して10月20日スリナガルに戻つた。
7. 1930.12~ 31. 1	冬のロータン・パス (クル)	〔三田幸夫〕 滞印中の三田氏はクル地方の厳冬期登山を計画し、冬のロータン・パスを目指したが、多量の降雪に遭い引き返した。併し乍ら冬のヒマラヤで貴重な経験を得た。
8. 1936. 8~11	ナンダコット	〔立大山岳部=堀田弥一(隊長)、山県一雄、湯浅敏、浜野正男、竹節作太(報道)〕 日本から初の本格的ヒマラヤ遠征隊としてガルワル・ヒマラヤへ向い、全員、初登頂に成功し、帰路トレイル・パスを越えてアルモラに帰つた。
9. 1952. 8~12	マナスル踏査隊(ア ンナプルナ及びマ ナスル偵察)	〔日本山岳会=今西錦司(隊長)、高木正孝、田口二郎、中尾佐助、林一彦、竹節作太(報道)〕 京都大学より計画を日本山岳会へ移しての最初のマナスル偵察行。アンナプルナ4峰試登、西チュルー登頂、マナスル一周を行い、東面マナスル氷河に登路を発見して帰る。
10. 1953. 3~8	マナスル (第一次登山隊)	〔日本山岳会=三田幸夫(隊長)、高木正孝、田口二郎、加藤泰安、辰沼広吉、村山雅美、加藤喜一郎、山田二郎、村木潤次郎、山崎英雄、石坂昭二郎、竹節作太(報道)、依田孝喜(カメラマン)、中尾佐助、川喜田二郎(科学班)〕 ブリガンダキ経由サマにベースをおき、6月1日、加藤(喜)、山田、石坂7,750M迄登る。科学班(植物学、文化人類学)は本隊と別行動をとり、広範囲に調査を行つた。
11. 1953. 8~12	アンナプルナ 第二峰・四峰	〔京大学士山岳会=今西寿雄(隊長)、藤平正夫、伊藤洋平、舟橋明賢、藤村良、脇坂誠、立平宣雄(報道)〕 二峰の南西はとりつき下可能のためナムン・パンジャンを越え北西に廻り、四峰をティルマンのルートに従つて攻撃するも、時期既に遅くジェット・ストリームに天幕を破られ、C・5より下山した。